

Title	『史学』一〇〇年の総括と展望：序言
Sub Title	Review of historical studies published in the journal Shigaku during the past 100 years and their future prospects : preface
Author	『史学』編集委員会("Shigaku" henshū iinkai)
Publisher	三田史学会
Publication year	2022
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.91, No.1/2 (2022. 9) ,p.25 (25)- 26 (26)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2021年度三田史学会大会総合部会シンポジウム報告：『史学』一〇〇年の総括と展望
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20220900-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

序言

二〇二一年六月二六日（土）に三田史学会大会において、『史学』一〇〇年の総括と展望」という題名で総合部会シンポジウムがオンライン形式で開催され、その内容は、以下のように二部で構成されていた。

講演一 神崎 忠昭

『史学』から読む三田史学会のこれまで

（一九九〇年以前）

講演二 「一九九〇年以降の各専攻」

- ① 浅見 雅一（日本史学専攻）
- ② 岩間 一弘（東洋史学専攻）
- ③ 野々瀬浩司（西洋史学専攻）
- ④ 杉本 智俊（民族学考古学専攻）

次にこのシンポジウムの開催趣旨について、簡単に説明する。一九二一年一〇月に三田史学会の機関誌『史

学』が創刊された事実から計算すると、二〇二一年一〇月で丁度その一〇〇年周年を迎えることになる。本シンポジウムの主目的は、それを記念して、三田史学会と『史学』が果たしてきた歴史学全般への学術的貢献に関する理解を深めながら、現在同誌が抱えている課題をより正確に認識し、今後について考えるための題材を提示し、本学会のさらなる学術的発展に寄与するために必要な建設的な議論を提供することにあった。なお、かつて一九九〇年六月一六日（土）・二三日（土）に「三田史学の一〇〇年を語る」という大規模なシンポジウムが、慶應義塾大学三田キャンパスにおいて開催され、その内容に関連した豊富な報告記録が『史学』（六〇巻二・三号、一九九一年六月公刊）に収録されている。この企画との間に内容上大幅に重複した形態でのシンポジウムを、今の時代にあえて開催する意義はあまり認められないと判断された。従って本シンポジウムでは、一九九〇年の

三田史学会大会総合部会シンポジウムの内容を踏まえて、それを補完しながら、一九九〇年のシンポジウム以降を中心に議論を展開させることを主眼としていたのである。そのような趣旨に基づいて、まず講演一で一九九〇年までの三田史学会と『史学』の歩みを俯瞰し、それを受けて講演二では、それ以降に史学系四専攻がそれぞれ『史学』とどのように関わってきたのかについて総括した。

『史学』編集委員一同